

春燈

八月号

8

August 2008



久保田万太郎の句

たかぐとあはれは三の酉の月

『流寓抄』昭和三十三年

小説、戯曲、俳句等々、多様な作品を展開。中でも震災後、劇作家として読売新聞社文学賞を受賞した「三の酉」は、浅草界限を背景に当時、吉原住まいの「おさわ」という芸妓との会話は、万太郎のさりげない語りかけによって、いきいきと活写され、「おさわ」の生きざまが見事に綴られている。「おさわ」という人物が実在したか否かは定かではないが、万太郎の温かい人柄が偲ばれ、名句となっている。

西村勝美

久保田万太郎の句

わが胸にすむ人ひとり冬の梅

句集『流寓抄』昭和三十三年

冬の厳しい寒さの中で綻ぶ梅の花、万太郎が己が心の中に温める一人の女性を梅の花に重ね、控え目ながらも熱く訴えてくるものがある。著書は小説、戯曲等と幅広い分野にわたる。浅草生れ、人情の深さを感じさせるものが多い。台本の行間に屢々出てくる「……」は想い入れの深さを表し、読者自身の想像を促すものと思う。家族の縁には薄かった。万太郎自身の心の漂泊と孤独の影が見え隠れする。

細江久美子

燈下集

鈴木榮子

射的屋へ矢印梅雨の伊香保かな

伊香保湯の町一人の部屋の明易く

波うてる昔ガラスの夏館

夢二画の女胸病む白夜かな

裸乙女の胸高からず籐寝椅子



山莊だより

金山雅江

雲の峰バリアフリーの山の家
D 51だと車椅子押す子らの汗
梅雨月夜富士参道の灯のともる
ラムネ玉ころころ鳴らし過去思ふ
蠅取りボンつるし髪の毛ひつばられ
赤とんぼ門扉とざせる遊園地
時々は物忘れして茗荷汁
飛び入りの蝗に騒ぐ子供達
湖の色俄かに変る秋入日
十六夜やひとりひとり寝る時間

昭和ひとけた

吉田かずや

葱坊主ひとに第二と言ふ門出
妻の出すものを素直に更衣
番頭の父の匂ひの単衣かな
米櫃の米のぬくもり走り梅雨
俎板は打楽器新玉葱を切る
手に蜥蜴休むを許す羅漢かな
少年に五分と刃向かふ蟹の意地
夜振火の消えて海鳴り俄なる
伊東屋の便箋えらぶ夕立かな
夫婦して昭和ひとけた冷奴

当 月 集

鈴木 榮子選



○ 松波とよ子

芍薬を活けて寧けく辰砂壺

走り梅雨輸出陶磁器真葛焼（横浜）

聞香や梅雨の憂さ消ゆきのふ今日

風炉点前軸に筆太「瀧」一字

夏点前まらうどへ秋茶碗かな

○ 高木曾精

幻の古窯を渡る青嵐

現川の窯の火の子と螢火と

青鷺の黙考つづく水田かな

草笛の無理な高音青春期

雲迅し庭に見なれぬ蟻の列

○ 久本久美子

葉桜や江戸の垢離場でありし川（雅叙園吟行）

竜宮城の廁まぶしむ五月晴

寺若葉立くも笑ふも羅漢かな

大雷雨花魁たちは裾押へ

夏兆す庭や実生の子沢山

○ 馬場宏一

パソコンも狂ふ卯の花腐しかな

愛聴のカルテット散る青時雨

梅雨冷や末期の老いに税重し

近海の鯖や異国の膳の上

安らぎの珈琲よりも朝茶かな

○ 宮沢治子

青嵐ブルーマンデー吹き散らす

赤べこの目と合ふ八十八夜かな

八十八夜風呂を熱めに沸かしけり

赤毛のアン読み耽ける娘や梅雨長し

夏川の瀬音断ちたるホルンの音

春燈の句

鈴木 榮子選

木簡の万葉集歌新樹光

花芯の禪王者のごときこがね虫

桐咲くや野守の鏡夕明かり

夕闇のがれ場癒せる葦の花

蛞蝓や心の中を這ひし跡

常夏に命延ばして信長忌

果てしなき夢の中なる大夏野

父の日を嫁は覚えてをりにけり

母の日や日比谷花壇の新品種

壁覆ふ木香薔薇のティータム

朴白し華麗極まる肥前磁器

足曲げてあんよの夢か昼寝の児

あぢさゐや墓碑銘刻むのみの音

尊する父と無言の酒なりし

みちのくのあの関越えむさくらんぼ

聖五月巴里のみやげの黒シヨコラ

東京 後藤真由美

バンコク 大口 憧遊

千葉 荻原美保子

神奈川 金子 輝

ふたたびのいい顔伊達公子の夏

「チベットに自由を」初夏の市民デモ

家康忌命冥加なほととぎす

蛇皮を脱ぎ肩の凝りほぐしけり

梅雨の晴間の本陣を訪ひにけり

大利根の梅雨を飽かずに歩きけり

梅雨の寺弥勒の肩のしかと濡れ

玉石に落つる雨だれ梅雨の寺

白牡丹かをる割烹店の午後

一保堂の土間でいたたく新茶かな

握り飯食ぶ緑陰の石の椅子

採れたてのそらまめ甘きビールかな

麦の秋もめんの服の皺伸ばす

花の名をつけて貰へぬ水中花

藤椅子や夕風たちて風匂ふ

夜の新樹めがねどこかに忘れけり

神奈川 石田 康明

茨城 君塚 敦二

千葉 竹内 慶子

神奈川 松田 千枝

余言

鈴木 榮子

芍薬を活けて寧けく辰砂壺

松波とよ子

壺を「辰砂」と意識して見たことはありません。水銀と硫黄の化合物で、色は朱紅色の鉱石で顔料の朱として使うようです。

そこに活けてある花が芍薬となると「立てば芍薬座れば牡丹」の芍薬ですから、それに適う辰砂の壺なのです。

そして「活けて寧けく」と詠んでおられますから花と壺が相俟って共に見事なのでしょう。

上五から下五まで詠み下して句の品が定まった二句です。

葉桜や江戸の垢離場でありし川 久本久美子

「垢離場」は水垢離をとる場所で江戸末期東両国回向院あたりを思わせる所です。

「水垢離」は神仏に祈願するため、冷水を浴び身体のをれを取り去って清浄にすること、とありますが私は寡聞にして、その辛さに耐えることを指していると思っていました、祈禱が大本にあることは当然でしょう。水垢離は、今でもテレビなどで見るがあります。

尾を切りて蜥蜴当惑の中に暮る

吉田 洗樹

外飼いの猫がよく子蜥蜴を捕えて遊んだあと、家のドアの前に自慢の獲物とばかり置いてゆきます。爬虫類は名前を聞くだけでも身振りし耳を塞ぎます。

それなのにこの句はどこか愛すべき滑稽があります。

きつと「当惑」がポイントなのでしょう。この蜥蜴は、うっかり尾を切ってしまったので、その後の歩行にバランスがとれず困っているのでしょう。危険になると我が身の尾ぐらい切り捨てられても逃げるのでしょうか。

行列の兵隊蟻を老いの眼に

森 嘉夫

作者は兵役にいらつしやつたたことがあるのでしよう。軍隊経験のある作者にとって、働き蟻の行列は在りし日の行軍を思い出されたことと思います。

隠れ棲む天神下や傘雨の忌

丹羽 香久

湯島の女坂脇の坂の途中から拝見出来る久保田先生のお宅は、最近あの辺にいつていないので、どうなっているのでしょうか。後年安住先生が女坂から久保田邸をご覧になつて、「僕が住みたいねえー」とはにかみ心地におつしやつていらつしやつた。私が春燈に入門したのは四十二年で、いま「馬酔木」が句会をなさっている千駄ヶ谷の通称「東医会館」でありました。ですから三十九年に亡くなられた万太郎先生にはおめにかかつておりません。

父の日を嫁は覚えてをりにけり

大口 憧遊

父の日を息子さんが覚えていらつしやつたのではなく、その嫁さんが覚えていて下さつた！ということが作者を喜ばせているのです。

